

残って、階段状の海食面をつくるということであった。こんな身近に、このような地形学的にも面白い場所があるとは、思ってもみなかった。その後、台地に上った。登ると言ってもこれが一筋縄ではいかないものであった。きちんとした道とは思えないような傾斜面をよじ登ることになったのである。降雨で地面はぬかるみ、ともすれば滑り落ちそうになるのを周囲の草につかまりつかまり、必死の思いで登ったのだ。浅海先生はこの程度のことはものともなさないご様子である。先頭を切ってせっせと登頂なさって、下から苦闘しながら上がってくる私達の姿をカメラに収めては、笑っていられた。ひと言、「これが楽しみなんだな。」このサバイバルには閉口している者もあったが、私自身は結構楽しんでしまっていたのである。台地上をしばらく歩く途中、沈水海岸線に沿う海食崖、表層土壌である「くろぼく」とその耕作風景を観察した。やがて、眼下に春海町を見降ろしつつ、城ヶ島大橋を渡る。集落の様子は、道が狭く入りくんでおり、人家は軒をつき合わずように並んでいて、実に漁村集落の特色をよく表

していると思った。三崎町・白石町を抜けて海外町へ。海外町では、偽層や漣痕の露頭を観る。漣痕はその形状が非常によく保存されていて驚いた。砂岩、シルト岩は保存されやすいということであった。いずれにせよ、これは第三紀の地層の堆積環境を知る上で、貴重な資料であることは間違いない。そして、この露頭の少し先の海岸道路沿いにも注目すべき大露頭があった。スランプ構造を持つものである。断層が入っていたが、地回り面をつなげると、典型的な褶曲型スランプであることがよくわかった。

以上で観察ポイントを全て終えたが、この頃にはみんなだいぶ疲れていたようで、帰りの車中は無口であった。今回の巡検では、ひたすら“観察”に徹し、実習を行ったという気もするが、自分の目で確かめ、体験することは、こんなにも理解を深めるものであるということを改めて感じた。そして私は、いつにない充実した気分満ちて、帰途についたのであった。

( 6月 9日 浅海教官指導)

## 古河巡検

宇田川 晶 子

7月15日、16日の古河巡検は、1年生にとって、初めての巡検だった。

7月15日の10時に、東陽町の改札口に、内藤先生と、一年生12人、二年生2人、院生2人が集合した。そこからバスで、新木場へと向かったのだが、夢の島に入った頃からの外の景色は、東京とは思えない程オープンスペースが広々と広がっていた。まず初めに、東京新木場木材商工協同組合で、木場についての総合的な説明を聞いた。

江戸大火後、材木を1ヶ所に集めて火災から守ろう、という教訓から作られたのが深川木場であったが、昭和40年代後半から、新規用地を求めることの困難や公害問題を解決するため今の新木場へ移転した。現在、およそ116万平方メートルの敷地に600以上の事業所が集まり、都内第1の木材団地を形成している。

次に、実際に取り扱われている木材を知るために、東京銘木市場で、倉庫に保管されている木材を見せてもらった。

バスで東陽町に戻って、午後からは浅草橋の洋傘業を見学した。東京都洋傘ショール商工協同組合で、洋傘業の概要を説明してもらった。

洋傘は、江戸末期に外国から輸入されて以来、生活の洋風化とともに著しい普及を示し、現在では生活必需品となっている。生産は、古道具屋が輸入品の修理をしたのが技術的基礎となっていて、明治10年頃には輸入材料をもとにした加工業者が現れてきた。材料から完成品までを国内で作り出せるようになったのは明治22年頃であり、それから国内需要も伸びていった。日本は、一時は生産、国内消費、輸出が世界一で、「洋傘産業の世界の三冠王」と呼ばれた。しかし、台湾などの生

産量が拡大するにつれて、昭和50年代から日本の洋傘産業は衰退の途を辿っている。

説明を受けた後は、点在している傘の工場や横寺町の問屋を見学した。

5時頃に、上野から東北本線に乗って、古河へと向かった。丁度、通勤ラッシュの時間で、大宮を過ぎてもなかなか減らない乗客に、ずい分遠い所から通勤している人もいるものだ、と感心していた。

翌16日は、朝8時過ぎに行動開始し、古河市役所で、古河市に関する基本的な事項について説明を受けた。

古河市は、茨城県の最西端に位置する。茨城・栃木・埼玉の3県が複雑に入りこんでいて、鎌倉時代から水陸交通の要所として栄えてきた。人口密度は、茨城県で一番高い。商業都市として古くから発展してきたため、黙っていても客が集まるという意識が強く、商業の近代的発展はむしろ立ち遅れている。大型店の進出は地元の商店街の反対で、実現しなかった。しかし、小山・大宮等の周辺の市に大型店が進出し、商圈を拡大したのに

対して、古河市はその谷間となり、販売力は縮小する傾向にある。最近、やっと重い腰を上げ始め、駅ビル（9月着工予定）の建設による再開発を計画している。

古河市についての説明を聞いた後は、市役所が貸してくれたマイクロバスで、洋傘工場・よしずを作っている稲川商店・建設省利根川上流渡良瀬工事事務所を見学した。

渡良瀬遊水池は、面積33平方キロメートル、周囲29キロメートル、総貯水容量2億トンで、山手線の内側とほぼ同じ広さである。堤防の上からの眺めの素晴らしさは、筆舌に尽くし難い。現在あいている土地を公園にする計画があり、その実現が期待される。

こうして、2日間の日程を無事終了し、4時に古河駅前で解散となった。たった1泊の巡検なのに、多くのところを見学し、多くの知識をえたという充実感に浸りながら、やがて提出しなければならないレポートのことはすっかり忘れて、参加者はいい気分で東京へ帰って行った。

（7月15～16日 内藤教官指導）